
メモダス

yuunagi

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

メモダス

【Nコード】

N0270BA

【作者名】

y u n a g i

【あらすじ】

暴君こと水無月アスカのせいで春休み最後の休日を返上する事になった如月瑞希とアスカの弟、水無月アキトの二人はいつも通りこき使われていた。その日の帰り道、瑞希は不思議な雰囲気を漂わすシスターと出遭い、他愛のない会話をした次の日にシスターさんを見た目がそっくりな転入生が登校初日に突然「私は……私を殺せる人を探しにここへ来た」と、爆弾発言をしてクラスを凍りつかせたのだが……。

序 章　死にたがりの少女　前篇 其の一

不思議な不思議な夢を見た。

周りには何もない見渡す限り真つ白な景色が広がる空間にポツリと佇む一人の少女……。

虚ろな表情を浮かべながら上を見上げて細くてしなやかな透き通る肌質の両腕を差し出して何かを求めているような。まるで、この何もない真つ白な空間から誰かが手を差し伸べ助け出してくれる事を待ち続けているようだった。

けれど、それは叶わぬ願いだと少女は薄々感じていた。時の流れさえ不確かなこの空間で一体どれだけの歳月が経過したのだろうか。いつからこのような事を続けているのだろうか。そして、いつまで続けられいいのか……。

それでも少女は眉一つ動かさず、虚ろな表情のまま差し出した腕を下ろさずに続けた。それが叶わぬ願いだろうとなんだろうと少女は少しでも可能性があるならと、祈りを捧げるように生気の無い瞳をゆっくり閉じて

「はい。却下」

呆れ果てた表情を浮かべてテーブルに叩きつけるように冊子を投げ飛ばし無情にも没宣告を告げるカチューシャを付けたセミロングの凛々しいお顔立ち、すらりと伸びた手足に非の打ち所が無い出るところ出たコケティッシュな体躯の少女。水無月^{みなつき}アスカは窓に寄りかかるように身を預けた。

「決断早えーよ、姉貴！」

アスカの無情な宣告に納得いかずテーブルを勢いよく叩き、立ち

上がりながら怒号を上げた少年。少女と瓜二つの顔付き、筋骨隆々とまではいかないが長身のがっちり体型である弟の水無月アキトは怒号を上げた後に静かに着席した。

「アキの言い分は分かるわ。だけど、根本的につまらない」

眉一つ動かさず淡々とした口調で吐き捨てるようにアキトの書きあげた最初で最後の今世紀最大の作品を酷評したアス力は額を押えて大きく嘆息する。

まだ、序盤中の序盤。出だししか目を通していないってのに、判断を下すのは少し早計過ぎやしないか、と心の内に留めながらも顔に出てしまっていたのか。アス力が眉間にしわを寄せてこちらを睨みつけているのに気付き、僕は目を逸らし少し咳き込みながら誤魔化した。

「まあいいわ。私がアンタ達に期待したのがそもその間違いだったわ。やっぱりこの退屈過ぎる生活を打破する為には私自身どうにかするしかないわね」

腕を組み仁王立ちをして凜々しい態度で僕達の事を嘲笑うかのように切り捨て、顎に手を添えて何か企んでいるのか思案顔になった。つたく、だったら最初から自分で何とかしろっての……。

僕が心の中でアス力に対して悪態をついていると弟であるアキトが姉に聞こえないように小声で、

「なあーキサラ。そんなにつまらなかったか、コレ……」

姉にボロクソに言われ、少しムスツとした表情を浮かべながら彼が書きあげた作品が綴じられた冊子をこちらに提示して僕に意見を仰いできた。

ふむ、と僕は冊子に手を伸ばして流し読みではあったがアキトが書き綴った「仮題 閉じられた少女」に目を通した。

主人公の少年が毎夜毎夜見る不思議な夢に登場する虚ろな表情を浮かべる少女は一体何者なのか？ なぜ、少女は真つ白な空間に閉じ込められているのか？ なぜ、少年はこのような不思議な夢を見るのかという話のようだ。

「いや、お前は頑張った方さ。初執筆の僕達にたった十分で短編を書けと命令し、出来上がるや否や少し目を通してただけでつまらんとってテーブルに叩きつけるアレがどうかしていると思えん」
アキトに労いの言葉をかけた僕は伸びをしつつ背もたれに寄りかかり天を仰ぐ。その際に少し椅子が傾きバランスを崩しかけたのは当然の事ながら秘密だ。

「姉貴の悪口を言うなあああ！！」

突然、アキトは体を震わせながらアス力の悪口(?)を言った僕に対して唾を撒き散らし頬を上気させて怒号を上げる。

「黙れ、シスコン！」

「いや、黙らんぞ！ あんなんでも俺の大切な姉貴だ！ 誰であろうと姉貴の悪口を叩く奴は俺が許さねえ」。姉貴の悪口を言っているのはこの俺だけだ！」

弟である俺だけの特権だと誇張したいのか、アキトは両親指で自分の事を指さして意味もなくはにかんでみせる。

「あゝだったら、僕の代わりにお前の後ろで不気味に微笑みながら仁王立ちをしている姉貴に向かって一言言ってくれ」

「承知した。ホント、あのクソビッチは」

「アゝキゝくん。あのクソビッチって誰の事かなあ？」

僕の代弁者たるアキトの背後から口元を歪ませ凄惨な笑みを浮かべながら抱きつき耳元で囁く、ク 水無月アス力様……。

アス力様のしなやかで美しい腕がアキトの首に絡み、最初は抵

抗をしていたものの徐々にアキトの顔色が青ざめていき、目が白目をむき口から泡を吹いていた。それを特等席で目の当たりにしていた僕は手を合わせて、

「南無」

「まだ、死んでねえわ!」

ハアハア、とよっぽど苦しかったのだろう、アキトは肩をならし過呼吸のように必死に息を吸う。

「アキをいじめちゃだめよ。シゲル」

今し方、弟に行った教育(?)という名の暴力的行為は何もなかったかのようにアス力は微笑み、あたかも僕がやったかのように装う。

「直接手を下したのはお前だろうに」

僕は一応ながら後ろにいと教えてやったのだが、あの馬鹿が調子づいて口を滑らしたに過ぎない。決して誘導なんてしていないぞ。

「それはそれよ。そんな事よりもシゲルも私に何か意見がお有りなのかしら?」

笑顔のまま手と首をパキポキと鳴らし意見を言おうならば即手を下せるように慣らし始めた。

「いえ、何にもございません!」

僕はアキトの二の舞になるのだけは避けるべく、ご機嫌を損なわないよう椅子からすぐさま飛び上がり深深く土下座をした。腕が三角に綺麗に折れていたと思う。

ん? プライド? ナニソレ? ヨコモジワカンナイ……。

「そう、ならいいわ。それと今日はもう解散よ。また、明日からよろしくね」

そう言い残してアス力は野郎二人を残してすたすたと部屋を出て行ってしまった。

僕は少し一安心して椅子の隙間を縫うように手足を伸ばして床に
転げ寝る。

「アキト、生きてるか」

「……ああ、大分マシになった」

肩をならして呼吸を整えていたアキトの生存確認を済ませた僕は
ゆっくりと瞳を閉じる。

『……はあ』

野郎二人の大きな溜め息が部屋の中で虚しく木霊した……。

序 章　死にたがりの少女　前篇　其の二

ちょうど一年前の入学式での事だ。

特にこれと言った趣味も楽しみもなく、毎日毎日作業のように決まった時間に起き、決まった時間に食事を取り。何気なく学校に通っていた僕は何のこだわりもなく適当に選んだ高校に進学して、これから新しい学生生活が始まるぞと言った心構えもなく。ただただ無心で桜が咲き誇り風が吹くたびに舞い散る桜が成形する桜の絨毯を歩いていた。

僕と同じブレザー制服を着てこれから始まる高校生活に胸を躍らせてはしゃぐ同級生達を目の当たりにして僕は思わず首を傾げた。

当時の僕に　いや、今でもそうかも知れないが意味の分からない光景だった……。

別に娯楽施設に向かう道中って訳でもあるまいし、何がそんなに楽しいのか。学校をテーマパークか何かと勘違いしている馬鹿なのか。

あるいは昔、中学の時に「学校楽しくない」などとぼざいていた輩がいたがアレと同じ類の人間で学校と呼ばれる場所に何かを期待している阿呆なのか……。

そんな考えを巡らせながら到着した、これといった特徴もないどこにもある平凡な造りの公立高校……。適当に選んだだけあつてこの学校の特色やら校風は全く分からないし、僕が通う高校はこの学校で合っているのかさえ分からない。

だけど、体育館らしき建物に向けて歩く僕と同じブレザー制服を着た生徒達が周りにいるのだから合っているのだろ。第一、僕は入試試験などで何度も来ているはずなのだが、はっきり言って全然記憶になかった。それどころか高校生になった実感すらなかった。

考え方や気持ちが中学生の頃と何ら変わりが無いからなのか、た

ただただ通う場所が変わったという印象だけしかない。

ふむ、また退屈な作業の日々が始まるのか……。

演壇に立った校長なのか教頭なのか分からない中年代の男性が新入生に向けて話を始める。

周りの生徒達は演壇で流暢に話をする中年男性の話を真剣に聞き入っていたけれど、僕は校歌らしき歌詞が描かれた掛け軸のような物の近くにあった時計を眺めていた。早く時が過ぎるように念を込めて……。

はつきり言って苦痛だった。

季語を巧みに織り交ぜて上手く話しているつもりだろうけど、そんな事はどうでもいい。さっさと話を切り上げて解放してくれと願うばかりである。

すると、僕の想いが届いたのか話が終わり各々のクラスに向かう事となった。

他のクラスの生徒達の波に吞まれないように辿り着いた何の変哲もない教室で　一年B組の教室で僕は目を付けられてしまった。

いや、巻き込まれたと言った方がいいのかも知れない。

自席に座っていると突然、見知らぬポニーテールの女子生徒に「君は、生きているの？」と訳の分からない事を平然とした態度で僕の目を見て聞いてきたのだ。

生きているの？　と唐突に聞かれて呆気にとられながらも「はい、生きてますよ」と馬鹿正直に答えればいいのか分からずに黙っていると「私は、絶賛仮死状態中」とこちらは何も聞いちゃいないし何も言っていないのにも関わらず、女子生徒は嘆息交じりに訴えかけてきた。

この女子生徒がさっきから何を言っているのか全くもって謎だが、初対面の相手にする話では決してない事だけは理解できた。

「ねえ、退屈って人を殺すと思わない？ 私は殺すと思う。だって、生きてる心地すらないでしょ？」

僕の反応なんて知ったこっちゃないと言わんばかりに自論を展開する女子生徒に僕は少々気後れし、顔も引きずっていたと思う。

「だからね。君も私と一緒に生きたいと思わない？ 君を一目見た時にビビッと身体に電気が走ったんだ。私と同じ人種だとね……」

自分と同じお仲間を見つけて嬉しかったのか瞳を輝かせ、少し語気を荒げて言う女子生徒に僕は嫌気が差していた。

これが所謂空気が読めないって奴なのだろうか。ここまで人の顔色を間近で覗える距離でいるのにも関わらず話を繰り出せるってある種の才能を感じられる。それに傍から見ていると逆ポーズをされているように見受けられるし……。

「いや、一人盛り上がっている所すまないが……僕は君が思っているような人間じゃないと思う」

「いえ、君は私と同じく退屈の日々を暮らす死者も当然の存在よ。浮遊霊のように流れに身を委ねながらでいいの？ 私はごめんだわ。折角この人格で生を受けたのよ。だったらこの人格でしか味わえない人生を楽しまなきゃ損よ」

僕の言動で熱が入ったのか、バンと机を叩きさらに自論を展開する女子生徒。

ああ、火に油を注いってしまったな。さらに瞳をキラキラと輝かせている。それに思いのほか机を叩いた音が大きかったのか、周りにいたクラスメイト達が何事かとこちらを見つめているのに気付いた。

「君は生者になりたくないの？ 毎日が作業のような機械じみた

日々を送ってていいの？ 私は嫌だわ」

それでも女生徒は周りの視線なんて知っちゃこっちゃねえと一蹴するかのように声を荒上げて口走る。

ああ、分かった。これはアレだ。宗教が何かの怪しげな団体の勧誘なんだな。誘致人数のノルマを達成しないと現在置かれている地位から降格されるみたいなシステムか？ だから、ここまで必死に熱弁しているんだな。まるでマルチ商法みたいだ。

うん、だとしたらだ。周りのクラスメイト達を巻き込む訳にはいかないよな。目を付けられたのは僕なんだし……。

まあ、本音を言えばクラスメイト達の事なんてこれっぽっちも考えていない。さっさとこの状況を打破したい、ただそれだけだ。

「ああ、分かった分かった。降参だ。話なら後でたっぷりとどっぷりと聞いてやるからこの場は引いてくれ」

僕は息を吐いて女生徒の熱意にやられて少し心が折れたように見せた。もちろん嘘だ。この状況を打破されれば、僕の勝ち。後はとんずらすればいい。

「そう？ なら決まりね。じゃ、行きましようか」

女生徒は手を叩きそうという僕の腕を掴んで走り出していた。

僕は状況を飲み込めず呆氣にとられる。この女生徒は僕の話の聞いていたのか？

いや、これっぽっちも聞いちゃいないな。

半ば強引に僕は女生徒に引っ張られるような形で不本意ながら教室を後にする事になり、どういう道筋で辿り着いたかさえ分からない、とある部屋で僕は女生徒と顔がそっくりな男子生徒と出会う事になった……。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連「横書き」という考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n0270ba/>

メモダス

2011年12月31日18時49分発行